

三商レポート

第十六話 「生きざまを伝える」

(株) 三商 内藤 雄

9月17日、幸運にも絵門ゆう子さんの講演「命をつなぐカウンセリング」を聴く機会に恵まれました。

「この平和な日本で、私はまるで戦場にいるようです。」と、余計な挨拶なしに話は始まりました。

うかつにも、私は絵門さんのプロフィールを会場で配られた資料で初めて知りました。【元NHKアナウンサー・キャスター・女優・エッセイスト・産業カウンセラー・ご自身ががん患者・著書に「がんと一緒にゆっくりと」・現代医療への不信からあらゆる民間療法を渡り歩いたあげくに全身転移・病院へ駆け込み、良き医師に出会い抗がん剤治療を受ける・しかし、その抗がん剤も効かなくなって・・・】

こんな重篤な病状の方が、何でこんなに素敵な笑顔で明るく人前で話ができるのだろう。目と耳を疑いました。

「きょう、この会場に向かうため家を出ようとした時、戦友のご主人から『今朝、妻が亡くなりました』と電話がありました。」こう話された時、絵門さんの目に涙があふれ声がつまりました。しかし、その後はテンポよくエネルギーに話が進みました。

“泣いてなんかいられない。私は生きたい。生きて、私の体験や医療の現場のことをいっぱい伝えたい。生きている私が伝えなければいけないの。”

そんな想いがグングン伝わってきました。

- ① 治療技術を持つ優秀な医師は大勢いても、病気に打ち勝つ患者自身の生きる力を引き出せる言葉の技術は乏しい。
- ② 患者は、西洋医学と民間療法の狭間で悩んでいる。
- ③ 医者は患者に事実を明かせ。しかし、いつまで生きるかは言わないで。
- ④ ○○先生を信じる力が自己治癒力となり、治ることもある。
- ⑤ カウンセラーの心を持った医師・看護婦の言葉の力は大きい。

(絵門さんの講演の言葉から)

絵門さんの命がけの講演や執筆や活動は、まさに絵門さんの生きざまそのものだと思います。失礼ながら、こうした“生きざま”こそが相続の本質なの

だとあらためて感じました。生きざまを伝えること、一生懸命に生き抜いてきた姿を伝えることが本来の相続なのだ。不動産やお金を残すことが相続なのではない。モノやカネは、おまけにすぎない。だから、財産なんて残さなくてもいい。借金があっても恥じることはない。そして、この貴い生きる姿を受継ぐことが相続なのだ。不動産やお金をもらうことが相続なのではない。

絵門さんは、生きることを通して家族に・戦友に・そして私たちに大切なことを伝えようとしてくれている。役割を与えられた絵門さんは、生きる力を自ら生み出している。つらいことや悩みを抱えて生きている私たちも、今こうして生かされていることに感謝したい。そして、自分の役割を命ある限りまっとうしたいと思います。

(絵門さんのホームページ <http://www.emon-yuko.net/>)

(2005年10月5日)